道頓堀界隈の過去と現在

福田明文[1]・吉川　眞[2]・田中一成[3]

[1]学生会員　大阪工業大学大学院工学研究科都市デザイン工学専攻博士前期課程
（〒535-8585 大阪市旭区大宮5-16-1，E-mail:fukuda@civil.oit.ac.jp）
[2]正会員　工博　大阪工業大学工学部都市デザイン工学科
（〒535-8585 大阪市旭区大宮5-16-1，E-mail:yoshikawa@civil.oit.ac.jp）
[3]正会員　博士（デザイン学）　大阪工業大学工学部都市デザイン工学科
（〒535-8585 大阪市旭区大宮5-16-1，E-mail:issey@civil.oit.ac.jp）

江戸期以来，道頓堀界隈は演劇の街として栄えてきたが，戦後は「食い倒れ」と「巨大看板」が道頓堀界隈のイメージとなってきた．近年，水の回廊を活用して「水都大阪」を復活させようとするプロジェクトや，商業施設の中に大正・昭和時代の街並みを再現する試みなど，かつての賑わいを取り戻そうとする動きも見られる．道頓堀は，今も昔も「水都大阪」の象徴であり，その歴史的変遷を把握することで大阪の都市変容を把握でき，道頓堀の歴史的価値を高めることができると考えている．本研究では，散在する史料や資料などを収集し，GIS上に整理・蓄積することで，を用いて道頓堀の歴史的変遷の把握や地域特性の抽出を試みている．また，CAD/CGも統合的に用いて３次元モデルも構築している．

キーワード: 道頓堀界隈, 大大阪時代, 歴史的変遷, 空間情報技術

１．はじめに

江戸期から戦前まで，道頓堀界隈は歌舞伎などが興行される演劇の街として栄えてきた．その歴史は江戸時代に舟運や利水のために堀が開削された後，界隈の街づくりが始まった．とくに大正時代は，近代建築と伝統建築が入混じり，モダンで華やかな文化が誕生した大大阪時代であったとされる．さらに，大正 14 年の人口においても，大阪市は東京市を抜いて日本最大であり，昭和７年に大東京が形成されるまで，日本最大の都市を形成していた[1)]．

大阪では昭和時代においても堀が開削され，水都と称されてきた．だが戦後，近代化が急激に進むにつれて堀川は埋め立てられ道路へと変わり，それと同時に橋も無くなってしまった．その結果，「水都大阪」のイメージを変容させてきたが，道頓堀は今も水都を象徴する貴重な堀川である．また，道頓堀界隈も戦後から現在にかけて「食い倒れ」と「巨大看板」のイメージを加えてきたが，本年（2008）５月に角座が閉館，また，看板人形で有名な飲食店「大阪名物くいだおれ」も７月に閉店し，さらにその姿を変えつつある[2)]．

一方，近年では，市内に残された数少ない水の回廊を活用して「水都大阪」を復活させようとしているさまざまなプロジェクトがあり，かつての賑わいを取り戻そうとしている．それと同時に新たな都市魅力を創出し，新しい文化を創造しようともしている．このような背景を持つ道頓堀は今も昔も大阪の象徴であり，その歴史的変遷を把握することで都市形成過程の一端を垣間見るとともに，道頓堀界隈の歴史的価値を高めることができると考えている．

２．研究の目的と方法

本研究では，GIS（Geographic Information System）を用いて散在する史料や資料を収集し整理・蓄積することで，道頓堀の歴史的変遷を把握することを目的としている．さらに，この過程で得られる知見や資料が，新たな歴史的史料となることもめざしている．

その具体的な方法は，収集した古地図，旧版地図，地籍地図などを現代空間上に研究室で開発された手法を用いて定位し[3)]，そこから得られる情報を，GIS アプリケーションを用いて読み解いている．その結果から，都市構造の歴史的変遷の把握を行っている．とくに，地価に着目し，２次元空間上に視覚化することで，地域特性の抽出を行うとともにその変遷を把握している．さらに，CAD/CG を統合的に用いて大大阪時代の道頓堀界隈の３次元モデルを構築し，歴史的景観の特徴を把握するとともに，現在の景観と対比し，その特徴を見出すこともめざしている．

3．対象地区

道頓堀は，木津川と東横堀川の間に位置している（図-1）．その歴史は，豊臣秀頼によって開削を命じられた安井道頓とその弟である道卜らが私財を投じて行ったことから始まったとされている．開削後は家屋などの建設が行われ，1626 年には勘四郎町（現在の南船場周辺），通称芝居町から芝居小屋などが道頓堀の南側に移設された[4]．これが，道頓堀演劇街の幕開けとなった．また，浪花座，中座，角座，朝日座，弁天座は道頓堀五座と呼ばれ，演劇を楽しむ人々で日々賑わっていた．道頓堀は，道頓堀五座を中心として，それらに付随して芝居茶屋などの飲食街も発達してきた．角座の閉館によって，五座は全て消失したが，道頓堀界隈は現在も大阪有数の繁華街である．

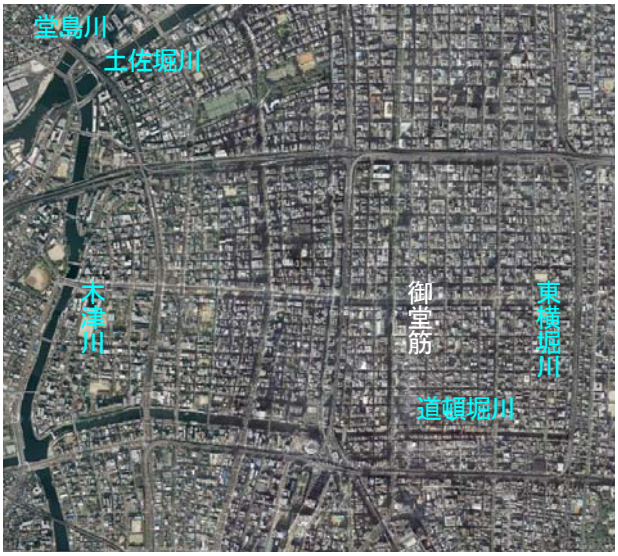

図-1　道頓堀の位置

4．データベースの構築

江戸時代から現代に至るまでの道頓堀界隈における歴史的変遷を把握するために，収集・蓄積した古地図や旧版地図などを現代空間上に定位した．定位に用いた現代図は1/2,500精度の大阪市デジタルマッピングデータを用いた．地理空間情報として定位した時期は，元禄年間（図-2），天保年間，明治前期，明治後期，昭和初期（図-3），戦後復興期，高度経済成長期，現代（図-4）の８期である．

昭和初期の街区を見ると，堺筋と千日前通など道路の拡幅がすでに行われていることが容易にわかる．これらは，明治 45 年に市電（堺筋線）を開通させるために立退きや軒切などが行われたためである．また，これらと同時に橋梁においても鉄橋へと架け換えられ，永久化橋となっている．

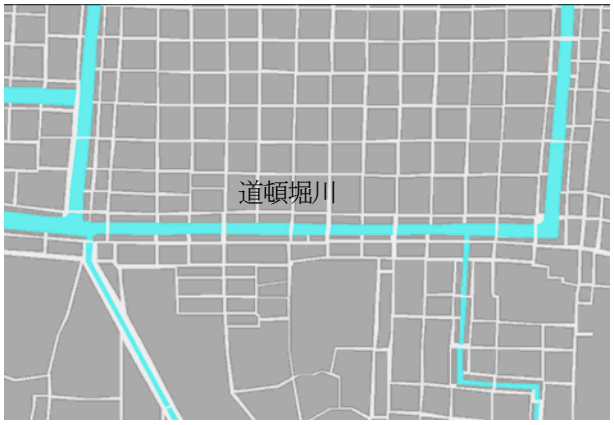

図-2　元禄 16 年の道頓堀界隈

図-3　昭和初期の道頓堀界隈

図-4　現代の道頓堀界隈

5．道頓堀の地価

(1)地籍台帳・地籍地図〔大阪〕

大大阪時代の地域特性の把握には，1911 年（明治 44 年）に発行された「地籍台帳・地籍地図〔大阪〕」の復刻版を用いた（図-5）．この原版の台帳は大阪で初めて出版されたものである．その背景は，市街地の急激な膨張に伴って地価が高騰し，土地売買が盛んに行われ，土地の経済的重要性が高まり，その権利者を示す地籍地

図・台帳が必要となったためである．また，土地所有状況を網羅的に把握できる本資料の有用性は高いと考えられている[5]．

図-5　地籍台帳・地籍地図[大阪]

(2) 地価マップ

集客力のある場所は必然的に地価が高くなることに着目して，大大阪時代の道頓堀界隈で，どこが華やかで賑わっていたのかを把握，比較するために地価マップの作成を行った．なお，地籍台帳に記載されている明治 44 年の地価を，現代の貨幣価値に換算し，地価マップを作成している（図-6）．また，現代の地価マップは路線価を用いて作成した（図-7）．

地価マップを見ると，明治 44 年では歓楽街であった五座周辺と心斎橋筋で最も地価が高いが，現代では御堂筋の開通によって，御堂筋付近が最も地価が高くなっており，歓楽街は相対的に見ると低くなっている．

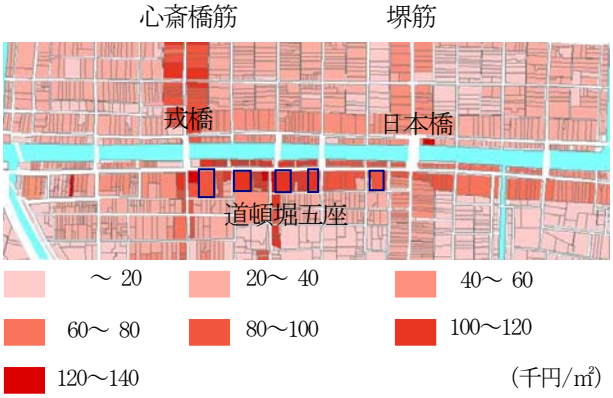

図-6　明治 44 年の地価マップ

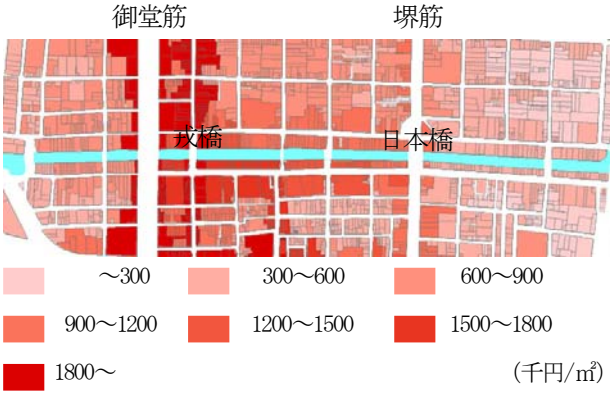

図-7　現代の地価マップ

6．３次元モデルの構築

大正９年に発行された雑誌「道頓堀」のスケッチ（図-8;図-9）を紹介している『モダン道頓堀探検』や古写真[6]などの史料を参考にして，研究室で開発済の手法により，道頓堀通りの３次元モデルの構築を行った[7]．作成した建物モデルを配置し，テクスチャをマッピングした後，レンダリングを行っている（図-10;図-11）．その建物モデルは，地籍地図に描かれている敷地とスケッチに描かれている建物を照らし合わせて，正確な位置へ定位している．

３次元モデルを構築することによって，大大阪時代の道頓堀界隈がより想像性豊かに再現され，その文化的価値を見出すことが可能になると考えられる．

図-8　大正９年のスケッチ（パノン付近）

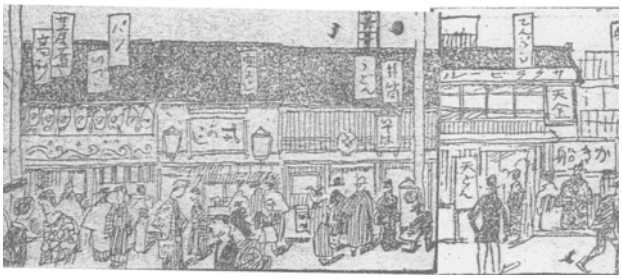

図-9　大正９年のスケッチ（戎おこし付近）

図-10　３次元モデル（ファサード）

図-11　３次元モデル

７．過去と現在の対比

作成した３次元モデルと，ほぼ同じ視点から撮影した現在の写真と対比を行った（図-12;図-13;図-14;図-15）．

大大阪時代の道頓堀は，道頓堀五座や芝居茶屋，老舗や有名店などの木造建築が立ち並ぶ中に，カフェなどの近代建築も入り混じっているが．軒がそろっているなど街並みに連続性が感じられる．さらに，屋根の上には物干し台も見られ生活感も感じられる．一方，現在では壁面のほとんどが看板となっており，突き出し看板も多数あることから建物自身の存在感が弱く，看板による情報量が多いことがわかる．

図-12　現在の道頓堀界隈（北側）

図-13　大正時代の道頓堀界隈（北側）

図-14　現在の道頓堀界隈（南側）

図-15　大正時代の道頓堀界隈（南側）

８．　おわりに

道頓堀界隈の地理空間データベースを構築したことにより，道路の拡幅や堀川の埋め立てなど，現在に至るまでの都市形成過程の一端を垣間みることができ，新たな資料として活用することも可能となった．さらに，地価を対比させることにより，位置的な重要度，つまり，地域特性の抽出ができたと考えられる．GISを用いて歴史的変遷を把握し，過去の道頓堀を知ることに加えて，３次元モデルを構築することで，あらゆる視点からの景観検討も可能になったと考えている．

今後の課題としては，大阪の原形である江戸時代との比較，３次元モデルの精度向上と添景などの配置や他地区との地価マップの比較も必要であると考えている．

謝辞：本研究を遂行するにあたり，大阪大学総合学術博物館の橋爪節也教授には，大正時代における道頓堀のスケッチなど，貴重な資料の提供をはじめとして，多くのご協力をいただいた．ここに記して謝意を表します．

参考文献

1)　橋爪節也：モダン道頓堀探検　大正、昭和初期の大大阪をあるく，創元社，2005
2)　読売新聞社：ミナミの看板息子“定年”，読売新聞，pp.31，2008年４月９日
3)　田ノ畑聡史，吉川眞：過去との繋がりを考慮した位置参照点の提案，地理情報システム学会講演論文集，Vol.13，pp.447-450，2004
4)　真銅正宏：大阪のモダニズム，ゆまに書房，2006
5)　名武なつ紀：地籍台帳・地籍地図〔大阪〕解題，柏書房，2006
6)　アーカイブス出版編集部：昭和の大阪郷愁のあの街この街，アーカイブス出版，2007
7)　奥住洋介，吉川眞：元禄空間の復元，地理情報システム学会講演論文集，Vol.９，pp.113-118，2000